国

語

(解答番号 1 ~ 22

第一問 の一節である。これを読んで、後の問い(問1~8)に答えよ。 次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも山竹伸二『共感の正体 つながりを生むのか、苦しみをもたらすの

文章Ⅰ】

感じ、助力をオしまないことも少なくない。 声をかけるだろう。悲しみへの共感であれば、涙があふれ、慰めるであろうし、苦しみに共感すれば、助けてあげたいと しみ)が生じ、他人事ではないと感じられる。喜びへの共感であれば、自分のことのように嬉しくなり、「よかったな」と 共感という経験は対人関係における感情共有の確信であり、共感が生じると多くの場合、相手に対して親和的な感情 (親

り利他的行為を可能にするのである。 のか」という欲望を告げ知らせる以上、共感は「他者がどうしてほしいのか」を理解し、相手が望む行為の選択を、つま この時、自己了解(自己の感情への気づき)と同時に、他者の感情了解が生じている。自己了解が「自分がどうしたい

気持ちや望みを言葉で確認することができるし、それによって適切な対応を取ろうとする。そうやって経験を何度も積み 重ねるほど、次第に的を外すことなく相手の感情を理解できるようになり、適切な対応が可能になる。 もちろん、自分の感情と相手の感情が同じである、という保証はない。だが、私たちは共感を手がかりにして、相手に

動物の共感と区別する上でも重要なものだと言える。 こうした理解力を培うには、言葉と想像力、推論する理性の力を身につけることが必要である。それは、 人間の共感を

人間と動物の共感の大きな違いは、言葉で相手の気持ちを確認できることだ。共感は相手と自分の感情が同じであると

高くなる。言葉による相互理解がなければ、共感は独善的な他者理解に陥ってしまう可能性があるのだ。 っているのかを知る、というフィードバックの経験が繰り返されることで、私たちの共感の精度(当たっている確率) いう確信だが、言葉がなければその確信が正しいかどうかを知ることはできない。言葉があるからこそ、共感が勘違 った場合に確認できるし、正解だったと喜ぶこともできる。そして、こうした自分の共感による他者理解が正しい か間違 いだ

として具体化されるとき、そこに自己価値に関わる感情が生み出される。 もあるため、さらに共感の対象は複雑になる。自他未分の状態から自己が確立され、自己イメージが言葉によって「私_ も微細に区分され、微妙な感情の違いの共有をも可能にする。しかも人間は、 また、言葉の使用は人間に独自な意味の世界の共有をもたらしている。言葉は感情を細分化するため、共感される感情 嫉妬や恥、 羨望のような自我に関わる感情

いだろう。それは自我のある人間だけが持つ感情であり、言葉による感情の細分化を経ているからこそ生じ得るのだ。 たとえば、怒りや苦しみは動物にも共感できるかもしれないが、嫉妬や羞恥心、自尊心に関する共感が生じることはな 人間の場合、想像力と推論の力(理性)によって、さらに複雑な共感が可能になる。

うな想像的な世界もまた、言葉によって分節された意味の世界に基づいている。 ことができる。様々な記憶をたどり、知識を駆使して予想し、推論し、多様な状況を想像することができるのだ。このよ 私たちは目の前の世界を生きているだけでなく、実在しない架空の世界、ずっと先の未来の世界にも想像の中で生きる

九 とは異なり、 重なるものを見出せば、共感が生じることになる。それは、感情が同期してリアルにその感情状態に没入する情動的共感 することで、他者の思考や感情を推理することができる。そして、他者の感情や思考、 こうした想像力、推論する力は、当然、他者の内面世界にまで及び、私たちは他者の内面を想像し、他者の状況を考慮 推論する理性の力が形成された段階で生じる、人間に特有な共感なのである。 相手との同一性を認識することで感じる認知的共感であり、自我がめばえ、言葉が使えるようになり、 価値観の中に自分と同一なもの、

このような共感は、高度な認知能力にともなう共感であり、それは文化の異なる見知らぬ他者への共感を生み出す上で

とても重要なものだと言える。

あり、ヒュームが述べているように、共感こそが文化を形成する、と言えるかもしれない。 間が集団を形成し、社会において共通のルールを守り、協調していく上で、共感はとても重要な役割を果たしているので 感は、相手と同じ価値観、感受性、考え方であることを強く意識させ、仲間だという意識を強化する。もっと言えば、人 る。それは、自分と似たような境遇や状況の人のほうが、内面を想像したり、推測したりしやすいからだ。このような共 私たちは見知らぬ人よりも知り合いに対して共感が生じやすく、文化や価値観が同じ人間のほうが共感しやすい面があ

ければ、慰めなければ、という当為、行動が生じ得る。 のもうなずける。困っている人、苦しんでいる人に共感すれば、そこから同情や憐憫などの感情が二次的に生じ、助けな ともあれ、共感は相手に対して親和的な感情を生み、相手のための行動を惹き起こす。共感が道徳的行為の動機となる

は惹き起こされるのだ。 必要な認知的共感ではなく、感情が同期するだけの情動的共感であっても、相手の視点に立てる力があれば、 まだ言葉を使うことができず、想像力や理性の力の弱い幼児でも、泣いている子を慰めようとする。想像力や推論の力が 助けようとする。 利他的行為

らず、比較的冷静に対処することもできる。 れるだけでなく、想像力と推論によって、相手の立場、状況を考慮して行動できるからだ。また、情動的共感ほど熱くな ただし、認知的共感は利他的行為をより適切な方向へ導く力を持っている。 自分の中に湧き上がった感情に衝き動かさ

共感は人間にとって、利他的行為、道徳性の動機となる、とても大事な現象なのである。

共感によって生み出される利他的行為は、苦しんでいる相手を手伝ったり、 相手の救いになるように取り計らったりす

るだけでなく、相手の気持ちを受けとめたり、話を聞いてあげたりするなど、精神的なケアも含まれる。

理解することができる(自己了解を介した他者了解)。そして、自分が感じ、理解していることを相手に伝えれば、相手に 共感している側の人間は、自分の感情を注視することで、これこそ相手が今感じていることだと確信し、相手の感情を

とっては心理的に大きな救いとなる。

が受け容れられたように感じ、不安がやわらいだり、安心感を得ることができる。 まず、共感された側の人間は、苦しんだり、悲しんだりしているとき、誰かが共感してくれると、「ありのままの自分」

分の気持ちが理解され、肯定されたように感じるからであり、自分の存在そのものが受け容れられたことへの安心感、つ ちの否定的感情(寂しさ、焦り、悲しみ、怒り)は緩和され、肯定的感情(嬉しさ、喜び)は増幅するのだ。それは、自 ながりの充足感とも言える。共感は「偽りの自分」を演じる苦しみから解放し、無条件の承認の実感を与えるのである。 それだけではない。共感されることは自己了解を促し、気づかなかった本当の自分を自覚するための重要なケイキとなて。 アダム・スミスが指摘したとおり、共感は相手のカンキを活気づけ、相手の悲嘆を軽減する。共感を得ることで、私た(==)

は感じない。そうではなく、はじめて「自分の本当の気持ちがわかった」と感じるのだ。 合う余裕を失い、自分のことがよくわからなくなっているため、共感されることで「自分の気持ちをわかってくれた」と 自分の感情、思考は大丈夫だ、そう感じることができる。しかし、強い不安を抱えている人は、自分の感情や思考に向き 私たちは誰かに共感されると、自分の感情は正しい反応であり、相手に受け容れられている、という嬉しさを感じる。 る。

これはつまり、共感によって自己了解が促された、ということである。

くれると、自分の語りに自信と安心が生まれ、どんどん自分の語っていることがクリアになっていく場合がある。 たとえば、自分の悩みを打ち明け、モヤモヤしたものを信頼できる人に語っているとき、相手が共感的な態度を示して

相槌をうっているだけなのに、勝手に自己理解が進展する、そんな感じである。

感してくれる人の言葉を聞くことは、自分のことを知る上で多くのシサが得られるのである。 手は、自分と同じ感情を抱いているだけでなく、自分よりもその感情の意味を理解していることが少なくない。相手がし っかり自己了解のできる人であればなおさらだ。したがって、不安を抱えて自己了解が難しくなっている人にとって、共 また、共感してくれる相手の何気ない一言がヒントになり、自分への理解が深まる場合もあるだろう。共感している相

どうすべきなのか、その可能性も見えてくる。 とができる。どんな自分でもこの人は受け止めてくれる、という安心感が生じるため、シンシに自分と向き合えるように なり、自分のよくない思考や行動も自覚(自己了解)できるようになるのだ。すると、自分がこれからどうしたいのか、 このように、私たちは共感してくれる相手の表情や言葉から、自分の感情にあらためて気づかされ、自己了解を得るこ

こうした原理は、心理的治療や看護、介護、保育などにおける心理的ケアに共通するものであり、だからこそ、これら

文章Ⅱ】

の領域では共感が重視されているのである。

あっても、それに近い経験、関係のある経験があれば共感できるのだ。 う。たとえば頭痛の経験がある人は、腹痛の経験がなくとも腹痛に苦しむ人の気持ちが少しはわかる。経験のないことで 心理学者の河合隼雄は、共感とは、自分の体験を共通の因子として、相手の体験につながっていこうとすることだとい

ことと、私の体験とは相当違うのだが、あるいは、違うが故に、その違う体験を共通に感じ合おうとしてこそ、二人 共感的理解というのは、その人のされたこと、私のしたことがよく似ていて共感できるのでなくて、その人のした

とにして相手に共感し、理解できる、ということだ。そうした体験には共通の因子があるため、それを手がかりにして共 河合隼雄が言いたいのは、他者との完全な一致、完全な理解などあり得ず、違いはあっても、それに関連する体験をも

感が可能になる。

である ることのできる人は、それを、共通の因子として経験の枠組みを拡げることができる」(同右)からだ。 ンセラーは自分の経験を深めるように普段から心がける必要がある。それによって、より深く共感ができるようになるの その際、同じことでも深く体験した人は、より多くのことが共感できるようになる。「ひとつの経験を豊かに深く経験す 1 、カウ

了解)し、自分なりに内省してその経験の意味を考えておく、ということだろう。そうすれば、似たような経験の意味を 「経験を深める」というのも難しい言い方だが、一つ一つの経験において、その都度感じたことをしっかり自覚 (自己

考える上で有効な手がかりになるはずだ。

ある意味で当然と言えるだろう。 経験も感受性も考え方も違うのだから、同じことを経験しても、その捉え方、感情、経験の意味にズレが生じてくるのは 私たちは他者とまったく同じ体験はできないのだから、共感による他者理解に誤謬が生じる可能性は常にある。

なると複雑になり、ズレが生じる可能性も少なくない。それに加えて、文化によって異なる複雑な体験や考え方になると、 的理解に大きなズレが生じる可能性は少ないのだ。しかし、自我に関わる感情 他者理解が間違うことはあまりない。誰もが経験し得るような、人間に共通する苦しみ、怒り、悲しみに関しては、共感 生命の危険に対する不安や身体的な苦しみ、家族を喪失する悲しみなどであれば、文化的な差異もほとんどなく、その (嫉妬、 羞恥、 罪悪感、 自尊感情など)に

異文化の人間には推し量りがたくなる。そのため、自分の経験や知識だけで判断しようとすると、誤解も生じやすくなる

のである。

(注)1 ヒューム ―― デイヴィッド・ヒューム (一七一一~一七七六)。イギリスの哲学者。

2 アダム・スミス ── アダム・スミス (一七二三~一七九○)。イギリスの哲学者・経済学者。

— 7 **—**

問 1 傍線部アーオの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa~dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが1、イが2、ウが3、エが4、オが5

ウケイキ				カンキ				アオしまない			
;	b	a	d	С	b	a		d	С	b	a
	記事がケイサイされる	他社と技術テイケイを結ぶ	旧友とカンダンする	重大なケッカンがある	女王のタイカン式が行われた	苦言をカンジュする		体験をセキララに語る	イセキを訪ねる	セキジツの面影を重ねる	過去へのアイセキの情

d

ケイリャクをめぐらす

С

ケイヤク書に署名する

問 2 空欄 エ オ シンシ シ サ**|** 1 a d b d С С b а シンチョウに議論を重ねる 事件のシンソウを知る 経歴をサショウする 中古品をサテイする シンエンな思想に触れる 人権のシンガイは許されない 犯罪をキョウサする リーダーをホサする

むしろ に補うことばとして最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 6 b もしくは C したがって **d** しかし e なぜなら

のうちから一つ選べ。解答番号は 7

相手の気持ちや望みを共感によって理解したうえで、過去の経験に基づきながら相手に対する適切な言葉がけ

b を選択する能力。 相手に対する親和的な感情を抱くとともに、過去の経験に基づきながら相手の発言や表情から相手の感情を正

С 確に認識する能力。 相手のことを他人事ではないと感じたことをきっかけとして、過去の経験に基づきながら相手の感情を推測す

d 自分と相手は同じ感情を抱いているという共感を手がかりに、言葉で確認しながら相手が自分に何をしてくれ

るか想像する能力。

る能力。

е

確に把握する能力。

相手と同じような感情を共有できるという確信に基づいて、言葉で確認しながら相手の感情や相手の希望を的

問 4 傍線部B「人間に特有な共感」とあるが、なぜ「人間に特有な共感」が生じるのか。その説明として最も適当なも

のを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 8

化の異なる見知らぬ他者に対しても、想像力や推論の力によって、架空の世界で互いの価値観を確認し合い、共 人間は言葉を持つことで、他者の感情を確認し、微妙な感情についても理解することができるだけでなく、文

感の精度を高めることができるから。

b

感情も持つようになったため、様々な経験に基づく知識を駆使することによって、独善的な他者理解を回避でき 人間は言葉を持つことで、他者の感情を想像する力と推論する理性の力を手に入れ、同時に自己価値に関わる

るから。

るようになったため、文化の異なる見知らぬ他者に対しても、生きてきた背景の違いにとらわれず、内面を正確 人間は言葉を持つことで、自我に関わる感情を理解したり感情の微妙な違いを踏まえて他者を理解したりでき

に想像できるから。

d

同一性を認識できるから。

有することができるだけでなく、想像力を働かせて他者の状況を考慮し、他者の思考や感情を推理して相手との 人間は言葉を持っているため、他者の感情を確認することや、言葉によって細分化した微妙な感情の違いを共

е るだけでなく、知識を駆使して他者の内面についても想像力を働かせることで、自他の価値観の違いを正確に把 人間は言葉を持っているため、他者の感情を言葉にしたり、自分の感情との微妙な違いまでも表現したりでき

握できるから。

問 5 傍線部で「サルやイルカ、クジラも苦しんでいる仲間に共感し、助けようとする。」とあるが、ここで筆者はどうい

うことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は|9

的行為の発動には認知的共感は必ずしも必要ではないということ。 情動的共感しか生じない動物でも相手と感情が共鳴しさえすれば利他的行為が惹き起こされることから、利他

b 利他的行為の発動には協調性が大切であるということ。 情動的共感しか生じない動物でも相手と共通の感情を持ちさえすれば利他的行為が惹き起こされることから、

С 認知的共感が生じない動物でも相手の状況が理解できさえすれば利他的行為が惹き起こされることから、 利他

的行為の発動には感情に基づく認識が欠かせないということ。

d 行為の発動には相手の視点に立つ力は不要であるということ。 認知的共感が生じない動物でも苦しんでいる同一種に対しては利他的行為が惹き起こされることから、 利他的

е は幼児程度の理解力があればよいということ。 認知的共感が生じない動物でも多くの種において利他的行為が惹き起こされることから、利他的行為の発動に

問 6 傍線部D「そうではなく、はじめて『自分の本当の気持ちがわかった』と感じるのだ。」とあるが、これはどういう

ことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 10

- が何をしてほしいかを理解することを通して、自分の本当の気持ちがわかるようになるということ。 自分と似たような境遇や状況にある人が苦しんでいた場合、相手に対して親和的な感情を強く抱き、その相手
- b 相手の反応を得る経験を重ねていくことで、聞き手としての自分の存在価値を再確認できるということ。 「ありのままの自分」でいることに不安を抱いている人の相談に乗る場合、相手の救いになるよう取り計らい、
- С 無意識のうちに「偽りの自分」を演じている人の場合、自分の思考が見えなくなってしまっているため、相手
- の何気ない一言で自分の客観的な姿を知ることができ、新しい自分を発見することができるということ。
- 受容的な態度や言葉から、今まで認識できなかった自分の感情にはっきりと気づかされるということ。 不安を抱えて自己了解が難しくなっている人の場合、自分の感情が見えなくなってしまっているため、相手の
- 分の感情や思考に向き合う余裕ができ、自分は人から認められる存在であると自覚できるということ。 自分のことがよくわからなくなっている人の場合、相手に受け容れられているという安心感を得ることで、自

問 7 のはどれか。【文章Ⅱ】を参考にしながら、その具体的な説明として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選 傍線部E「これらの領域では共感が重視されているのである」とあるが、「共感」に関して筆者の考えと合致するも

べ。解答番号は 11

- 理解することができるが、痛みや苦しみの程度は疾患によって千差万別であるため、患者のそれぞれの状態をよ 看護師は、自分が痛みや苦しみを感じた経験を持つと、その経験から患者の痛みや苦しみをある程度は想像し 層理解する手がかりとして疾患についての知識を増やす必要があるということ。
- b ことによって、両者の感情や経験の持つ意味のズレが小さくなるように心がける必要があるということ。 の吐露を促すことができるが、生徒の感情を誤解する可能性は常にあるため、教員は自分の経験を考察しておく **、自分が思い悩んだ経験を持つと、その経験から境遇の異なる生徒の悩みをある程度は受け止め、**
- どもの代わりに心情を言語化することで、子ども自身の理解を手助けする必要があるということ。 るが、子どもは身体や言葉が発達途上の段階であるため、保育士は自分の子ども時代の体験を紐解きながら、子 保育士は、様々な子どもと接した経験を持つと、その経験から子どもの心のうちを想像し理解することができ
- いよう慎重に言葉を選ぶとともに、必要な介助を先回りして考える必要があるということ。 ことができるが、他者の生活支援を必要とするような被介護者の感情は推し量りがたいため、 介護福祉士は、 高齢者と身近に接した経験を持つと、その経験から被介護者の身体的な状況を想像し理解する 自尊感情を損ねな
- 判断するのではなく、データによって患者の状況を正確に把握する必要があるということ。 験から患者の不安を受け止めることができるが、身体的な条件は個人差が大きいため、自分の経験や知識だけで リハビリテーションを行う理学療法士や作業療法士は、自分が身体に不自由さを感じた経験を持つと、

次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨と合致しないものを、次

のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 12

問 8

- ね。サルが群れを組んで助け合っているのも、情動的共感が作用するからなんだね。 生徒 A ―― 動物は何も考えずに自由に生きているイメージがあったけれど、情動的共感というのがあるんだ
- b 痛みに共感できるのは、人間が言葉によって想像力を働かせるからだよ。 生徒B ― 認知的共感という言葉も出てきたね。友達の骨折の体験談を聞いただけでそのとき友達が体験した
- С こうしたことも人間が持っている推論の力のなせるわざなんだ。 生徒じ――お母さんが疲れた顔をしていると、言葉の分からない赤ちゃんでも心配そうにすることがあるよ。
- d ずくだけで、安心感や癒やしに繋がって心理的ケアになるんだよね。 生徒D-― 共感にはケアの力もあるよ。 苦しんでいる相手に何もしてあげられなくても、 ただ話を聞いてうな
- り高くなるよ。相手を誤解していないか言葉で確認することが大事だよね。 生徒 E ―― 共感したつもりでも、相手が自分とは異なる背景や文化を持っていると、誤解が生じる可能性はよ

「暇」と「退屈」という二つの語は、しばしば混同して使われる。「暇だな」とだれかが口にしたとき、その言葉は 退退

屈だな」と言い換えられる場合が多い。しかし、当然ながら暇と退屈は同じものではない。

暇とは、何もすることのない、する必要のない時間を指している。暇は、暇のなかにいる人のあり方とか感じ方とは無

関係に存在する。つまり暇は客観的な条件に関わっている。

それに対し、退屈とは、何かをしたいのにできないという感情や気分を指している。それは人のあり方や感じ方に関わ

っている。つまり退屈は主観的な状態のことだ。

たとえば、定住革命は暇という客観的条件を人間に与えた。それによって人間は、 退屈という主観的状態に陥 った。

このように説明できるだろう。

なっているのだろうか? 両者は必然的に結びつくのだろうか? こうして二つの語を正確に位置づけると、新しい問題が見えてくる。両者の関係の問題である。暇と退屈の関係はどう 暇に陥った人間は必ず退屈するのだろうか? それと

も、暇に陥った人間は必ずしも退屈するわけではないのか?

あるいはまた、退屈の側から暇を眺めれば次のような問いが出てくる。退屈は必ず暇と結びついているのだろうか?

つまり、退屈しているとき、その人は必ず暇のなかにいるのだろうか? それとも退屈しているからといって、必ずしか

暇のなかにいるわけではないのだろうか?

上の問題を、暇の価値という観点から考察してみよう。

私たちは「ひまじん」という言葉をいい意味では使わない。それはたいてい人をバカにするために用いられる。また、

一暇だ」という一言が自慢げに語られるとは思えない。要するに暇というのは 1

ところがこれと逆のことを述べた本がある。経済学者ソースティン・ヴェブレン [1857-1929] の『有閑階級の理論

(一八九九年)である。

のことを言う。ヴェブレンはこの階級に注目しながら、人類史の全体を描き出そうとした。

この本を読み始めると読者は最初とても驚く。いま述べた通り、そこでは、暇であることにはかつて高い価値が認めら

れていたと書かれているからである。つまり、有閑階級は周囲から尊敬される高い地位にある階級だったと書かれている

のである。

しかし有閑階級とは いわば *ひまじん*の階級である。なぜこのようなことになるのだろうか?

まじん」という言葉に否定的な価値が与えられるのもそのためだ。 だ」という言葉はほとんどの場合、「退屈だ」という意味である。だから暇であることが悪いことに思えるのである。「ひ このような疑問が出てくる原因は、暇と退屈の混同にある。既に述べたように、私たちはしばしば両者を混同する。「暇

済的条件を手に入れているということだ。 ことだ。余裕があるとは裕福であるということだ。すなわち、あくせく働いたりしなくても生きていける、そのような経 しかし、よく考えてみよう。暇があるとはどういうことだろうか? 言うまでもなく、暇があるとは余裕があるという

の時間の大半を労働に費やさねば生きていけない人のことだ。暇のない人とは、経済的な余裕のない人である。経済的に 余裕がないのだから、社会的には下層階級に属する。いわゆる「貧乏暇なし」のことである。 逆に、暇のない人たちとはどういう人たちであろうか? 暇のない人とは、自由にできる時間がない人、つまり、自ら、

彼らは労働を免除されている。労働は下層階級が彼らの代わりに、彼らのために行うのである。それ故、ヴェブレンはこ 有閑階級とは、社会の上層部に位置し、あくせく働いたりせずとも生きていける経済的条件を獲得している階級である。

のように述べたのだ。ギリシャ哲学者の時代から現代にいたるまで、労働を免除されていること、そこから解放されてい

ることこそが価値あるすばらしいことだったのだ、と。

こう考えてもよいだろう。有閑階級とは、いわば、暇であることを許された階級である、と。

(中略)

る。暇であることこそが、尊敬されるべき高い地位の象徴である。したがって暇は明確なステータスシンボルとなる。 彼ら富をもつ者は、自分たちで生産的活動を行う必要がない。やるべき仕事がない、そのことこそが彼の力の象徴であ

暇はステータスシンボルなのだから、有閑階級は自らの暇を見せびらかそうとする。これをヴェブレンは「顕示的閑暇」

と呼ぶ。これは『有閑階級の理論』という本のカギとなる概念であり、有閑階級の根幹を支えるものである

代行してくれる存在である。 い。そこで、彼の暇を目に見える形で分かりやすく代行してくれる人間集団が登場する。使用人集団である。彼らは暇を 有閑階級は暇を見せびらかしたい。では、どうすればよいだろうか? 単に暇であることを人に見せつけることは難

るが、まさしく彼らはそれを仕事にしているのである。 して重要でもない仕事を熱心に行い、主人に仕える。これが「閑暇の遂行」である。「暇を遂行する」とは奇妙な感じがす **-**彼らはきれいな身なりをして、自分たちに多大な費用がかかっていることを示す。調度品の維持など、生活するには大

き出しにした暇の見せびらかしは避けられているからである。 暇の見せびらかしが進んだ段階を、ヴェブレンは「半平和愛好的産業段階」と呼ぶ。奴隷の使用など、略奪や暴力をむ

のに留まっている。それは当然だろう。他人の暇を「遂行」するために人が雇われるような社会が不平等に満ちているこ しかし、「半平和愛好的産業段階」で実現されているのは、その名の示す通り、完全な平和ではない。平和は形式的なも

とは言うまでもないからだ。

産業社会」の到来である。これは、ヴェブレンが『有閑階級の理論』を出版した頃に現れ始めていた二〇世紀の大衆社会 歴史もまたこのような判断を下し、社会は徐々に変化していった。賃金労働者と現金支払制を中心にした「平和愛好的

を指していると考えられよう。

生きたヴェブレンの頭にもおそらく、凋落していく有閑階級の姿が思い描かれていただろうと思われる。 九世紀末から二〇世紀頭にかけて、いわゆる有閑階級(その大半は利子生活者)の 凋 落が見られた。 両世紀の境目を

この段階に至ると、使用人集団が減ってくる。富の再配分が見なおされ、階級差はすこしずつ縮まっていった。 その結

果として、暇の見せびらかしも有効性を失う。

は、 されるようになったわけだ。 の人の家にでも招かれてみなければ分からない。だが、何を着ていて、どんな家に住んでいて、どんな車に乗っているか その代わりに現れたのがステータスシンボルとしての消費である。ある人物がどれほどの使用人を抱えているかは、 一目見れば分かる。社会の規模が大きくなるにつれて、一目見てすぐに分かるようなステータスシンボルの方が重宝 ・ そ

うのは妻である。妻が消費を代行し、それによってまさしく〝主人〟の地位を示す。 また、かつては従者が自らの存在そのものによって主人の地位を顕示していたが、この段階に入ると、 顕示の役割を担

きた動因なのだろうか るのだろうか? たとえば使用人集団の発生を暇の見せびらかしというだけで説明できるだろうか? 単に、使用人集団 さて、以上がヴェブレンの歴史理論の大枠なのだが、読んでいると、いくつもの疑問が出てくる。それはなぜかと言え 暇の見せびらかしという一機能があったというだけのことではないだろうか? 顕示的閑暇は本当に歴史を動かして 何でもかんでも顕示的閑暇で説明しようとしているからである。本当にそれによって歴史のダイナミクスを説明でき

他にもいくつか問題はある。だが、ここではある一つの概念に注目したい。この概念はヴェブレン理論の問題点の核心

を教えてくれるからである。

高く評価し、不毛性、浪費すなわち無能さを低く評価する感覚」と定義されている。要するに、無駄を嫌う性向のことだ。 その概念とはヴェブレンの掲げる「製作者本能 instinct of workmanship」である。製作者本能は、「有用性や効率性を

ヴェブレンはそうした性向が人間の中に本能としてあると言う。

さらには物や努力の無駄な消費に対する非難をも生み出す。 とヴェブレンは言う。この本能は人間に、暇の見せびらかしや誰かに暇を代行させるといった明らかな無駄を蔑ませる。 たとえば、平和愛好的産業社会の段階になると、この本能は無駄と思われるものを審美的に拒否する感覚として現れる

暇の見せびらかしの基礎にあるのもこの製作者本能だと言うのである。「特殊な事情の下では」 ―― という言い訳がまし い一言を付しながらヴェブレンは言うのだが ―― この製作者本能は階級の区別や、武勇に対する好みを生み、結果的に 「競争心に基づく力の誇示」をもたらす。 さて、製作者本能は無駄を嫌う傾向のことなのだから、ここまでは簡単だ。問題はこの後である。ヴェブレンはなぜか、

製作者本能は暇の見せびらかしを生み出す。しかし、製作者本能は暇の見せびらかしを蔑ませるとも言われていたでは

暇の見せびらかしを生み出すものが、暇の見せびらかしを蔑ませるというのは何も説明していないに等しい。要するに

ヴェブレンの説明はここで破綻している。

ないか?

別の観点から言えば、「製作者本能」という言葉は実はあってもなくてもどちらでもいい。顕示的閑暇が或るときに生ま

なぜヴェブレンは無理をしてまで、こんな「本能」を人間に見出すのだろうか? それに対する蔑みが或るときに生まれたと言えばいい。それだけのことである。

答えは簡単である。人間に製作者本能をもっていてもらいたいとヴェブレン自身が切望しているからである。ヴェブレ

らかしもこの本能によって説明しなければならなくなる。だから無理が出てくる。 ンは自分の欲望をそこに投影している。彼は、浪費や贅沢を嫌う性向を人間の中に本能として見出したくて仕方ないのだ。 製作者本能を本能として説明するならば、過去の歴史もすべてこの本能から説明しなければならなくなる。暇の見せび

額に汗して労働することだけが幸福をもたらすのであり、文化などは消費に過ぎないと考えている。これがアドルノによ 本書の序章で言及した哲学者のアドルノがこの点を明確に指摘している。ヴェブレンはピューリタン的である。

るヴェブレン批判の骨子だ。

うか? て働くことだけが幸福をもたらすはずだと考えた。というか、そう自分に言い聞かせた。 アドルノは、ヴェブレンは有閑階級を妬んでいるのだと鋭く指摘している。なぜヴェブレンは彼らを妬んでいたのだろ 働かずに生きていける階級が存在していることが許せなかったからだろう。だからこそヴェブレンは、額に汗し

に、労働することこそがすばらしくて文化などはまやかしであるとか、そもそも人間には製作者本能が備わっているなど
ウーーー アドルノは芸術を非常に高く評価した哲学者である(自身はもともと作曲家志望であった)。だからヴェブレンのよう

といった説はガマンならなかったのだろう。

(國分 功一郎『暇と退屈の倫理学』による)

注 1 定住革命 人類学者である西田正規にしたまでき (一九四四~)が提唱した用語。一万年前に狩猟採集を行う移動生活を

捨て、定住を始めたことによる社会変革のこと。

テスタント諸派の総称。清純な生活をおくる人のたとえにも用いられる。転じて、極端に謹厳・潔癖な人のこと。 ピューリタン ―― 一六世紀後半、イギリス国教会の改革を不充分とし、信仰と生活の清純を保とうとしたプロ

つずつ選べ。解答番号はアが 13、イが 14、ウが 15

b а 深く考えずにぼんやりと

ひとつのことに集中して

С 目先にとらわれて落ち着かずに

アあくせくと

d あきらめずに粘り強く

е 休まず長い時間をかけて

a 全体の構成における中心的な内容

b 導き出された最終的な結論

詳細に説明するための具体例

1

骨子

С

主張の根拠となる社会的な背景

d

他に類を見ない独創的な視点

е

а 丁寧に取り扱うべきもの

理解できない不思議なもの 役に立たない弱々しいもの

ウ

まやかし

С

b

d 人の目をごまかすにせもの

人を危険に陥れるもの

е

時間がある

а

b 評判が悪い

c 感情的である

d 混同されやすい

e 条件がある

問 3 態に陥った。」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。 傍線部▲「たとえば、定住革命は暇という客観的条件を人間に与えた。それによって人間は、 退屈という主観的状

解答番号は 17

- 時間をもてあますようになったということ。 葉である。人間は狩猟採集をしなくなり、定住をするようになったことにより、何もすることがない時間ができ、 「暇」は、仕事や地位から離れ働く必要のない時間を意味するのに対し、「退屈」は、自分自身の心情を示す言
- b を得て、他者にも余裕を感じさせるようになったということ。 のように見えることを意味する言葉である。人間は狩猟採集をしなくなったことにより、リラックスできる時間 「暇」は、自分自身が物事から解放されて精神的にゆとりを感じる時間を表すのに対し、「退屈」は、他者にそ
- きたにもかかわらず、何かをする気力を失ったということ。 なることを示す表現である。人間は定住し狩猟採集をしなくなったことにより、他のことをする時間の余裕がで 「暇」は、何事にもとらわれない自由な時間を示す表現であるのに対し、「退屈」は、疲れて気力が衰え、嫌に
- d ために時間を使う必要がなくなり、自分のために自由な時間を得たということ。 のびと自由にふるまえる時間を示す言葉である。人間は狩猟採集をしなくなり定住することにより、 「暇」は、 空白の時間を物理的に示した言葉であるのに対し、「退屈」は、 物事から解放されて精神的にものび
- より、生きる意味を見出せる時間がなくなったということ。 るのに苦しさのために逃避していることを表している。人間は生命維持のための狩猟採集をしなくなったことに | 暇| は、 時間があるにもかかわらず何もすることがない状況を表すのに対し、「退屈」は、するべきことがあ

問 4 傍線部B「有閑階級とは、いわば、ひまじん、の階級である」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうと

しているのか。その説明として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は[18]

した人類史においては、有閑階級とは労働から解放される経済的な条件を獲得できたにもかかわらず、自由に過 私たちは、有閑階級を退屈な人々であるという意味で「ひまじん」の階級だと考えるが、ヴェブレンが描き出

ごす時間を獲得できない階級であったということ。

とする階級であったということ。 描き出した人類史においては、有閑階級とは経済的余裕を獲得するために自らの時間を積極的に労働に費やそう 私たちは、有閑階級を裕福であるため労働に対して消極的な「ひまじん」の階級だと考えるが、ヴェブレンが

労働を与えていた評価すべき階級であったということ。 否定的に捉えるが、ヴェブレンが描き出した人類史においては、有閑階級とは経済的に困窮している下層階級に 私たちは、有閑階級を周囲から尊敬されるため無駄に労力を費やすという意味で「ひまじん」の階級であると

d においては、有閑階級とは「ひまじん」と批判されることを気にせず、社会的な地位を放棄し、人づき合いや遊 びに暇を費やすことのできる階級であったということ。 私たちは、有閑階級を批判されるべき「ひまじん」の階級であると考えるが、ヴェブレンが描き出した人類史

が労働を代行する価値のある階級であったということ。 た人類史においては、有閑階級は経済的に恵まれていて生産活動を行う必要がないだけではなく、下層階級の人 私たちは、有閑階級をやるべきことのない「ひまじん」の階級だと批判的に捉えるが、ヴェブレンが描き出

当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 19

- らかすために、遊びや人づき合いに時間を費やすこと。 富の再配分によって上流階級と下層階級の格差が縮まったことで、時間的な余裕が生まれた人々が暇を見せび
- b びらかすために、使用人が指示された仕事を行うこと。 私有財産による格差がある社会では暇がステータスシンボルであり、経済的に優位な立場にある人の暇を見せ
- С るために、奴隷を解放して使用人として雇い自由な時間を与えること。 戦争や略奪によって権力を得ていた時代から平和的な時代に変わり、経済的に優位な立場の人が権力を誇示す
- d めに、使用人に身なりをきれいにすることを求めること。 階級差がなかった時代と同様に階級差ができてからも、上流階級の人々が自らの存在の価値を見せびらかすた
- е するために、自らの消費行動によって下層階級の人に恩恵を与えること。 賃金労働と現金支払制などで経済的な豊かさが顕著になったことで、経済的に優位な立場の人が豊かさを誇示

そ

の説明として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 20

ると指摘し、ヴェブレンの歴史理論を批判するため。 ヴェブレンの歴史理論の中核である製作者本能が、無駄を嫌い有効性や効率性を高く評価する感覚でありなが 社会的な地位、経済的な優位性などの力を誇示するという不毛性を好む感覚でもあるという矛盾を抱えてい

b ていないことを指摘し、ヴェブレンの歴史理論を批判するため。 しながらも、半平和愛好的産業段階から平和愛好的産業社会への移行をふまえた歴史のダイナミクスを説明でき ヴェブレンの歴史理論の中核である製作者本能が、十九世紀末から二〇世紀にかけての有閑階級の凋落を説明

感を指摘し、ヴェブレンの歴史理論を批判するため。 肯定されながら、一方で暇の見せびらかしによって使用人や妻が隷属的に扱われていたと否定されてもいる違和 ヴェブレンの歴史理論の中で、製作者本能による暇の見せびらかしは経済的な豊かさを示す価値あるものだと

d が、それはヴェブレン自身の願望に過ぎず、実際にはこうした本能を人間に見出すのは難しいということを指摘 ヴェブレンの歴史理論の中で、本来人間は浪費や贅沢を好み労働を嫌う製作者本能を持っているとされている ヴェブレンの歴史理論を批判するため。

摘し、ヴェブレンの歴史理論を批判するため。 びらかしが有効性を失っていったのは製作者本能によるとされているが、それは単なる偶然にすぎないことを指 ヴェブレンの歴史理論の中で、二〇世紀の賃金労働者と現金支払制を中心にした大衆社会において、 暇の見せ

問 7 傍線部E「そもそも人間には製作者本能が備わっているなどといった説はガマンならなかったのだろう」とあるが、

なぜ「ガマンならなかった」のか。その理由として最も適当なものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号

は **21**

- a 労働が免除されている階級のみが芸術や文化の享受を許されていると考えているから。 ヴェブレンは、芸術や文化を好む本能を人間に持っていてもらいたいと切望しているのに対して、アドルノは、
- b ヴェブレンは、芸術や文化が幸福の源として評価されるべきものだと主張しているのに対して、アドルノは、

幸福をもたらすのは芸術や文化ではなく、額に汗して労働することであると考えているから。

- С ルノは、芸術や文化を評価するべきものであると考えているから。 ヴェブレンは、有閑階級への妬みから労働を高く評価し、文化を無駄なものだと考えているのに対して、アド
- d ルノは、人間が持っているのは芸術を好む本能であると考えているから。 ヴェブレンは、無駄を嫌う性質を人間が生まれながらに持っているはずだと思い込んでいるのに対して、アド
- е ドルノは、芸術によって過去の歴史を説明するべきであると考えているから。 ヴェブレンは、暇を見せびらかす性質によって過去の歴史を説明しようと持論を展開しているのに対して、ア

問 8

筆者の考えに合致するものを、次のa~eのうちから一つ選べ。解答番号は 22

- まっていると指摘し、浪費や贅沢を求める本能を持つ人間にとっての芸術の必要性を主張している。 有閑階級の人は労働を行わないため「退屈」であるというヴェブレンの考えは、視野が狭く経済的な観点にとど 下層階級の人達は自らの時間の大半を労働に費やさなければならないため「暇」を持つことが難しい一方で、
- b だったと評価しているが、実際には大衆社会の到来と共に有閑階級が凋落することで階級差が縮小し、下層階級 うになったため、暇の見せびらかしは実際には人間の性向であり、権力の行使とは無関係であるとしている。 を使用した権力行使であると批判しているが、大衆社会が到来すると下層階級も芸術や文化の浪費を誇示するよ の仕事と考えられていた労働が重んじられるようになったため、「暇」の評価は下がっていったと指摘している。 有閑階級が暇の見せびらかしに奴隷を使っていたことを理由に、ヴェブレンは暇の見せびらかしは略奪や暴力 「半平和愛好的産業段階」において、ヴェブレンは有閑階級が持っていた「暇」が明確なステータスシンボル
- d を製作者本能によるものだとするヴェブレンの主張は主観的なものであり、整合性がないと批判している。 に偶然生まれ、それを嫌う性質も偶然生まれただけとも言えるため、暇の見せびらかしとそれを嫌う性質の両方 暇の見せびらかしが歴史を動かしてきた根幹にあるとヴェブレンは考えているが、暇の見せびらかしはある時
- も幸福をもたらすものではなく、文化や芸術こそが人を幸福にするものであると考えているが、アドルノがもと もと作曲家を志していたという背景を紹介することで、芸術や文化を過大評価していると警鐘を鳴らしている。 アドルノは、贅沢や浪費を嫌うことは人間の本能の中には備わっていないため、額に汗して働くことは必ずし